

「全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充」実施報告

Across-the-campus order made English education at Aichi Shukutoku University :
Report of systematic curriculum improvement in 2014-2015

二村 慎一
NIMURA Shinichi

太田 直子
OHTA Naoko

樗木 勇作
OTEKI Yusaku

若山 真幸
WAKAYAMA Masayuki

福本 明子
FUKUMOTO Akiko

キーワード：全学英語教育、リメディアル教育、TOEIC

1. はじめに

本稿は、愛知淑徳大学の全学英語教育を運営・実施している全学英語教育運営委員会が「全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充」という研究テーマで2014年度と2015年度に本学研究助成（特別教育研究）を受けて行った取り組みに関する実施報告である。特に、2013年度より開講しているリメディアル科目「Introduction to English」について、その概要と成果を検証・考察する。

本報告書の構成は以下のとおりである。2節では、本学の英語教育のカリキュラムについて述べる。3節では、「Introduction to English」の開設に至る経緯、学習内容、および履修状況について概説し、4節では、その学習効果について検証する。最後に5節では今後の課題について触れたい。

2. 「言語活用科目（英語）」のカリキュラムの特徴

この節では、リメディアル科目である「Introduction to English」の概要を説明する前に、本学の全学向け英語教育のカリキュラム体系とその編成の根拠となっている本学学生の英語習熟度について述べたい。

全学を対象とする「言語活用科目（英語）」のカリキュラムは、学生一人ひとりの英語学習の目標や習熟度に応じて、基礎レベルから上級レベルまで段階的に英語力を身につけることができるように編成されている¹。具体的には、表1のように、「リメディアル科目」・「基礎力養成科目」・「対話力養成科目」に大別された21科目が開講され、TOEICスコアや下位科目の単位修得に基づき、順次的に履修できるようになっている²。

科目区分	授業科目名	履修条件
リメディアル科目	Introduction to English	TOEICスコア240点以下の取得者
基礎力養成科目	Basic English 1	TOEICスコア245～295点の取得者、または、「Introduction to English」の単位修得者
	Basic English 2	
	English 1 (Listening)	TOEICスコア300～395点の取得者、または、「Basic English 1」か「Basic English 2」のいずれかの単位修得者
	English 2 (Reading)	
	English 3 (TOEIC 1)	TOEICスコア400点以上の取得者、または、「English 1」か「English 2」のいずれかの単位修得者
	English 4 (Speaking 1)	
	English 5 (TOEIC 2)	
	English 6 (Speaking 2)	
対話力養成科目	TOEIC Training Ia, b (Listening & Reading)	TOEICスコア500点以上の取得者、または、「English 3」と「English 5」の単位修得者
	TOEIC Training Ic, d (Listening & Reading)	TOEICスコア600点以上の取得者、または、「TTIa」か「TTIb」のいずれかの単位修得者
	TOEIC Training IIa, b (Speaking & Writing)	TOEICスコア500点以上の取得者、または、「English 3」と「English 5」の単位修得者
	TOEIC Training IIc, d (Speaking & Writing)	TOEICスコア600点以上の取得者、または、「TTIIa」か「TTIIb」のいずれかの単位修得者
	Advanced English Ia, b	TOEICスコア600点以上の取得者、または、「English 4」と「English 6」の単位修得者
	Advanced English IIa, b	TOEICスコア600点以上の取得者、または、「English 4」と「English 6」の単位修得者

表1 「言語活用科目（英語）」のカリキュラム体系

リメディアル科目である「Introduction to English」は、TOEICスコア240点以下の学生を対象とし、中学・高校の学習内容を復習するために開講されている。この科目はリメディアル科目という位置づけのため、卒業に必要な単位に算入されず、上位科目である「Basic English 1」と「Basic English 2」の前提科目となっている。

基礎力養成科目である「Basic English 1」と「English 1 (Listening)」の目的はリスニング力の養成を、「Basic English 2」と「English 2 (Reading)」のそれはリーディング力の養成をそれぞれのレベルに合わせて行うことである。また、「English 3 (TOEIC 1)」

と「English 5 (TOEIC 2)」はTOEICの練習問題を活用し、「English 4 (Speaking 1)」と「English 6 (Speaking 2)」は英会話を通じ、総合的な英語基礎力を養成することが目的である。

対話力養成科目の「TOEIC Training I a, b, c, d(Listening & Reading)・II a, b, c, d (Speaking & Writing)」では、TOEICの対策問題に取り組み、スコアの向上とビジネスの場で必要とされるコミュニケーション能力の養成を目指している。また、日本人教員が担当する「Advanced English I a, b」と外国人教員が担当する「Advanced English II a, b」では、英語でのディスカッションやプレゼンテーションを通じて高度な語彙力と英語運用能力を身につけることが目標である。

以上が本学の英語カリキュラムの概要であるが、このような基礎力養成を重視した科目の配置と下位科目から上位科目への段階的な履修制度は、本学の新生の英語習熟度の実情を反映したものである³。過去4年間の入学時のTOEICスコアの平均は次のとおりであり、本学の学生の英語力は高いとは言えないのが現状である。

2014年度	303点
2015年度	293点
2016年度	311点
2017年度	319点

年度によりスコアに差があるが、300点前後となっており、この平均スコアはTOEICを運営している国際ビジネスコミュニケーション協会が公表している大学1年生のTOEIC IPテストの平均スコア（430点）⁴に比べるとかなり低く、基礎力の養成を必要とする学生が多いことが分かる。

また、基礎レベルの新生が多いことは、入学時のスコアの分布からも見て取れる。表1に示した「言語活用科目（英語）」の履修条件に合わせた過去4年間の入学時のスコア分布は表2のようになっている。

年度	240点以下	245-295点	300-395点	400-495点	500-595点	600点以上
2014年度	432名	672名	833名	198名	22名	3名
2015年度	618名	557名	684名	186名	24名	6名
2016年度	523名	596名	905名	257名	51名	15名
2017年度	339名	637名	967名	273名	40名	19名

表2 入学時のTOEICスコアの分布（2014年度～2017年度）

例えば、平均スコアが最も高い2017年度においても、総受験者数2275名の内、240点以下の学

生が339名、245点から295点までの学生が637名であり、300点未満の学生が合わせて976名となり全体の43%を占めている。このことから、本学では基礎力の養成から始めるカリキュラムが求められていることが分かる⁵。

3. 「Introduction to English」の概要と実施報告

本節では、リメディアル科目である「Introduction to English」の概要とその実施内容を報告する。3.1節では、英語教育全体における本科目の位置づけについて、3.2節では、学習内容と使用テキストについて、そして、3.3節では、履修状況について述べる。

3.1. 導入の経緯とカリキュラム内の位置づけ

リメディアル教育の一環として本科目が開設されたのは2013年度である。この科目の導入に至った経緯は下記のとおりである。

若山他（2016：61）で詳述されているように、2012年度までのカリキュラムでは、2節で紹介した基礎力養成科目「Basic English 1」と「Basic English 2」が最下位の科目であり、履修条件はTOEICスコア295点以下となっていた⁶。しかしながら、新入生全体の英語力の低下にともない、100点台や200点台前半の学生も受講し始め、授業の運営に支障をきたすようになっていた。つまり、295点以下という履修条件を見直し、さらに細分化する必要性がでてきたのである。

このような状況を踏まえ、2013年度から「Basic English 1」と「Basic English 2」の履修条件に下限を設け、245点から295点までの学生を対象とすることに変更し、また同時に、240点以下の学生に対しては「Introduction to English」を新たに開講することとした。科目の位置づけは、後者を卒業に必要な単位に算入されない科目とし、前者の前提科目とした。つまり、「Introduction to English」は1年次の前期にリメディアル教育として大学の学修に最低限必要な知識を身につけ、後期に「Basic English 1」と「Basic English 2」を履修することを目的としたものである。

3.2. 学習内容と使用テキスト

本科目は共通のシラバスに基づいて、外国語教育部門所属の専任講師と元所属の非常勤講師が授業を担当し、きめの細かい指導を行うため、原則1クラス20名以下になるようにクラスを開講している（2017年度前期は17クラスを開講し、1クラス平均16名ほどである）。2017年度のシラバスは概略下記のとおりである。

[授業の概要]

TOEICスコア240点以下の取得者を対象としたリメディアル科目である。大学生活において、英語力は、文系・理系問わず、英語の文献を読んだり、情報を収集したりする際に必要となる。

この授業では、英語基礎力をしっかりと身に付けることを目的として、基本的文法事項と基本語彙の習得を目指す。

[授業の目標]

これまで学習してきた文法事項を再学習し、大学の授業で必要とされる英語の基礎学力養成を図ることを目標とする。

[授業計画]

第1回	オリエンテーション	
第2回	Unit 1 Jobs & Careers	現在時制
第3回	Unit 2 Entertainment	可算名詞／不可算名詞
第4回	Unit 3 Work Schedule	前置詞
第5回	Unit 4 Health & Fitness	過去時制
第6回	Unit 5 Shopping	進行形
第7回	Unit 6 Business Meeting	代名詞
第8回	Unit 7 Recruitment	現在完了
第9回	Unit 8 Customer Needs	接続詞
第10回	Unit 9 Business Trip	will/be going to
第11回	Unit 10 Advertising	比較
第12回	Unit 11 Factory Tour	受動態
第13回	Unit 12 Money Matters	動名詞／不定詞
第14回	Unit 13 Leisure	助動詞
第15回	まとめ	

[教科書]

『English Switch(ストーリーで学ぶ大学基礎英語とTOEIC®テスト頻出語彙)』

Robert Hickling・白倉美里(著) 金星堂出版

授業の概要や目標に明記されているように、中学・高校で学ぶ基本的な文法の知識と基本語彙の習得を目指す学習内容となっている。これは、上位科目(リスニング力の養成を図る「Basic English 1」とリーディング力の養成を図る「Basic English 2」)との接続を考慮しているだけでなく、語学学習の基本となる「覚える」という学習姿勢を再確認することも意図したものである。

共通で使用するテキストもこの目標に沿った学習内容のものが選定されている。担当教員が年度ごとに受講生の理解度や、習熟度とのかい離がないか等について意見交換を行い、次年度のテキストの選定や指導方法を検討し、今まで下記のテキストを使用した。

2013年度

『愛知淑徳大学 英語基礎ワークブック Savanna(サバンナ)』

愛知淑徳大学全学英語教育運営委員会（編）学研教育みらい⁷

2014・2015年度

『English First Basic(大学英語の総合的アプローチ：基礎編)』

Robert Hickling・白倉美里（著）金星堂出版

2016・2017年度

『English Switch(ストーリーで学ぶ大学基礎英語とTOEIC[®]テスト頻出語彙)』

Robert Hickling・白倉美里（著）金星堂出版

また、2013年度から2016年度までは、本科目はコンピュータ教室で実施されていたため、上記のテキストとともに、eラーニング教材（ALC NetAcademy 2）も併用し、授業内および授業外の課題として英語の基本的ルールや語彙をゲーム感覚で覚えるコースを学習内容の一部として取り入れた⁸。

最後に評価方法について述べたい。本科目は、授業への取り組み・課題・確認テストなどの総合的な基準により、合・否で評価される。クラスにより、受講者数や習熟度に差があるため、確認テストの内容等は、授業担当者に一任されているが、担当者間で授業計画や指導方法などの事前確認を行い、統一した基準の担保に努めている。

3.3. 履修状況

本科目は前期・後期開講しているが、リメディアル科目という位置づけのため、ほとんどの新入生が前期に履修をしている⁹。過去5年間の前期の新入生の受講者数は下記のとおりである¹⁰。

2013年度前期： 390名

2014年度前期： 392名

2015年度前期： 528名

2016年度前期： 397名

2017年度前期： 264名

2015年度の受講生が最も多く、2017年度はその半分となっている。これは入学時のTOEICスコアが240点以下であった学生数の違いを反映していると思われる（2節で示したように、2015年度は618名であり、2017年度は339名である）。また、ここ3年間の受講生数の推移から減少傾向にあることが読み取れる。

4. 「Introduction to English」の学習効果

最後にこの節では、前節で概要を説明した「Introduction to English」の学習効果を在学生のTOEICスコアの推移を基に検証したい。

はじめに本科目を受講した新入生の受講前（入学時）と受講後（8月上旬）に受験したTOEIC IPテストの平均点を見てみたい。下記が平均点の推移になるが、入学時には全員がテストを受験するが、受講後に受験をしない学生もいるため、受講後にもテストを受験した受講生のデータである。

2014年度前期受講生（現4年生）のTOEICテストの平均点（受験者数267名）

受講前： 215.4点

受講後： 237.1点

2015年度前期受講生（現3年生）のTOEICテストの平均点（受験者数335名）

受講前： 210.9点

受講後： 248.2点

2016年度前期受講生（現2年生）のTOEICテストの平均点（受験者数308名）

受講前： 215.0点

受講後： 240.9点

2017年度前期受講生（現1年生）のTOEICテストの平均点（受験者数194名）

受講前： 213.4点

受講後： 244.7点

2014年度では21.7点、2015年度では37.3点、2016年度では25.9点、2017年度では31.3点の伸びとなっており、伸びてはいるものの、大きくスコアが上がっているとは言えない。しかしこれは、学習内容が受講後すぐにTOEICスコアに反映されるとは限らず、その後の経年変化も見てみる必要がある。

では、経年変化はどうであろうか。残念ながら受講後もTOEICテストを受験し続ける学生は多くなく、1年次後期以降に1回以上受験した学生は2014年度受講生で57名、2015年度受講生で69名、2016年度受講生で36名である¹⁾。当該学生の入学時のスコア、受講後1年以内（1年次8月から2年次8月まで）のベストスコア、および、受講後から今まで（1年次8月から2017年12月22日まで）のベストスコアの平均は下記のとおりである。

2014年度前期受講生（現4年生）のTOEIC テストの平均点（受験者数57名）

受講前（入学時）： 216.4点

受講後1年以内： 280.1点

受講後から現時点： 307.8点

2015年度前期受講生（現3年生）のTOEIC テストの平均点（受験者数69名）

受講前（入学時）： 213.2点

受講後1年以内： 287.8点

受講後から現時点： 300.1点

2016年度前期受講生（現2年生）のTOEIC テストの平均点（受験者数36名）

受講前（入学時）： 211.3点

受講後1年以内： 289.3点

受講後から現時点： 289.3点

2014年度受講生では、1年以内の伸びは63.7点（216.4点 - > 280.1点）で現時点までは91.4点（216.4点 - > 307.8点）、2015年度受講生では、それぞれ74.6点（213.2点 - > 287.8点）と86.9点（213.2点 - > 300.1点）、2016年度受講生では、ともに78.0点（211.3点 - > 289.3点）¹²となっている。

また、入学時から現時点までのスコアの推移の内訳は下記のとおりである。

スコアの伸び	2014年度受講者（57名）	2015年度受講者（69名）	2016年度受講者（36名）
300点以上	1名	1名	0名
250点 - 295点	2名	2名	1名
200点 - 245点	1名	0名	2名
150点 - 195点	5名	11名	1名
100点 - 145点	14名	15名	7名
50点 - 95点	20名	20名	11名
5点 - 45点	9名	12名	10名
0点以下	5名	8名	4名

表3 入学時から現時点（2017年12月22日）までのスコアの伸び（内訳）

伸びが0点以下である学生（入学時とその後のスコアが同じか下がっている学生）もいるが、100点以上伸びた学生は、2014年度受講生では23名（全体の40%）、2015年度受講生では29名（全体の42%）、2016年度受講生では11名（全体の30%）である。また、最大の伸びは2014年度受講生では310点（ベストスコア545点）、2015年度受講生では310点（ベストスコア550点）、2016年度受講生では290点（ベストスコア480点）であった。

以上が経年変化の観察である。受講直後にはあまりスコアの伸びが見られないのは事実であるが、1年後やその後のスコアの推移も観察すると一定の学習効果があると言えるであろう。また、3年次、4年次と学年が進むにつれ平均の伸びが上がっている（現4年生は91.4点、現3年生は86.9点、現2年生は78.0点）のは、英語学習も継続され、TOEICの受験回数も増える

ことが反映されていると思われる。これは、語学学習の継続性の重要性を示している。

5. まとめと今後の課題

本稿では、リメディアル科目「Introduction to English」の実施と成果を中心に、全学英語教育の取り組みについて報告してきたが、最後に今後の課題について述べたい。

この報告書では、「Introduction to English」の学習効果を受講生のTOEICスコアの推移から検証したが、これだけでは十分とは言えず、別の観点からの考察も必要であろう。例えば、受講生が当該科目の受講後にどの上位科目を履修したのかも検証する必要があるが、これは別稿で行うこととしたい。また、受講生のTOEIC受験回数が多いこと自体にも一言触れておきたい。本学では学期ごとに無料で受験する機会があるにもかかわらず、受講生のほとんどが継続的に受験していないことは、英語学習への関心や意欲の低さを表しているとも言える。どのように英語学習の動機づけを与え、持続性の大切さを指導するのも大きな課題である。

「Introduction to English」を開講してから4年が経過し、5年目に入ったところである。開講当初は新入生の英語力の低下が問題となっていたが、ここ3年間の新入生のTOEICスコアを見る限り上昇傾向にあり、当該科目の対象となる学生が減少しているのも事実である。これが一時的なものなのか、または、英語力の回復を反映しているものなのかは来年度以降の入学生を待つ必要があるが、英語教育全体におけるリメディアル科目としての位置づけや科目の意義について今後も検討を重ね、授業内容の改善を行っていきたい。

注

1. 「言語活用科目」には英語の他に、中国語、韓国・朝鮮語、初めての外国語（ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語）があり、すべての学生が英語を選択しなくてはならないわけではなく、他言語を選択することも可能である。英語のみを指定しているのは、文学部教育学科、人間情報学部、心理学部、健康医療科学部 視覚科学専攻・健康栄養学科である。また、文学部英文学科では、一部の科目を必修の専門科目として学科独自の習熟度別クラス編成で開講している。
2. 本学では、全学生が入学時にTOEIC IPテストを受験し、前期・後期の履修登録前にも希望者は受験することができるようになっている。
3. 現カリキュラムに至る変遷に関する議論については、若山他（2013、2016）を参照されたい。
4. TOEIC Program DATA & ANALYSIS 2017 (http://www.iibc-global.org/library/default/toEIC/official_data/pdf/DAA.pdf) を参照されたい。
5. 2016年度より上位層の学生も増えているが、これは同年度にAll Englishを特色とするグローバル・コミュニケーション学部（定員60名）が新設されたことにより、習熟度の高い学生も入学していることを反映していると思われる。

6. 全学英語教育では、授業外の学習サポートプログラムとして「基礎からのやり直し英語」を2005年度から2007年度まで実施し、さらに、2008年度と2009年度は授業科目として（卒業に必要な単位として算入されないが）、「英語コミュニケーション基礎」をTOEICスコア300点未満の学生に開講していた。詳しくは、太田他（2009）と若山他（2013, 2016）を参照されたい。
7. 本学では、2010年度より、AO入試I・IIと指定校制推薦入試で入学する新入生に対し、入学前に国語と英語の課題を郵送し、入学時にその提出を義務づけている。『愛知淑徳大学英語基礎ワークブック Savanna(サバンナ)』は、この課題として全学英語教育運営委員会が編集したドリル式問題集で、基本的な文法事項を復習できるような学習内容になっており、2013年度は本科目のテキストとしても利用した。なお、この年度の授業内での使用も契機となり、2016年度入学者より難易度を下げた改訂版を入学前課題として配布している。
8. ALC NetAcademy 2は、株式会社アルク教育社が提供するeラーニング教材で、学内のPCだけでなく、学外のPCでも学習することができる。本学では、2016年度に語学教室の改修が行われ、PCに依存しない語学教育を目指すこととなったため、2017年度はeラーニング教材を学習内容の一部に指定していない。なお、eラーニング教材の活用を止めたわけではなく、2016年度より新たにモバイル環境にも対応したALC NetAcademy NEXTを導入し、他科目の学習内容の一部としてや授業外の学習サポートとして活用している。
9. 本科目の後期の履修者数は前期の再履修者も含め毎年度20名ほどである。
10. 2年次以上の学生も履修しているが、受講者数は2013年度では0名、2014年度では3名、2015年度では10名、2016年度では17名、2017年度では16名である。
11. 本学では学内で受験したTOEIC IPテストだけでなく、学外で受験した公開テストのスコアも（申告があったものは）全学のデータベースと全学英語教育運営委員会が独自に開発したデータベースにも保存されているため、公開テストの受験者も含めた人数である。また、2017年度受講生（現1年生）は、データ作成時（2017年12月22日）において、入学時と受講直後以外にまだTOEIC IPテストを受験していないため、対象外とする。
12. 2016年度受講生（現2年生）の受講後1年以内と今までのベストスコアは、期間が同じになるため、同一である。

参考文献

- 太田直子他（2009）「全学を対象とするオーダーメイド英語教育—「基礎からのやり直し英語」—」『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇』第34号，pp.13-30.
- 若山真幸・太田直子・樗木勇作・中郷慶（2013）「「全学を対象とするオーダーメイド英語教育の継続と発展」成果報告」『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇』第38号，pp.11-22.
- 若山真幸・太田直子・樗木勇作・二村慎一・福本明子（2016）「全学を対象とするオーダーメー

「全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充」実施報告（二村慎一・太田直子・梶木勇作・若山真幸・福本明子）

ド及びリメディアル英語教育の開発報告書」『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科
篇』第41号， pp.55-65.